

# 草庵仏教

第178号  
(発行日)  
2005年4月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
○ 真宗共学会 --- 毎月第一と  
第三木曜日午後7時より。  
\* 8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答⑩ 自他一如の救済

B 「さとり智慧を完成したお方が仏陀なのですね」

D 「ええそうです。その仏陀になるのが仏教の目的であり、人の目的です。阿弥陀仏の救済も迷い苦しむ衆生を等しく仏陀たらしめることです」

B 「なぜ阿弥陀仏の救済によらねばならないのですか」

D 「仏陀になることは、私たちの能力では及ばず、いつまでも迷いの境界を離れられないのがおおかたの私たちの現実だからです。こうした衆生のありさまを如来法蔵様(阿弥陀仏)は悲痛したまい、救い取ろうとされるのです。この思し召しは無量寿経に

『我、無量劫において、大施主となりて、あまねくもろもろの貧苦を濟わすは、誓う、正覺を成らじ』

と説かれています」

B 「この経文で衆生のことを貧苦といわれていますが、貧苦とはどういう意味ですか」

D 「如来法蔵様から見られた私たちは、心貧しく困窮し苦悩している者であり、煩惱にさいなまされ仏陀になる因が一つもな

い貧しき者なのです」

B 「如来法蔵様はこういう貧苦の者を仏陀にならしめたいと願われたのですね」

D 「そうなんです。仏になるべき因も、また因となるべき願も行もない無善の凡夫を救おうとされて、久遠の仏が法蔵菩薩という因位になり下り、一切衆生を救おうという自利利他円満の菩提心を起こし、六波羅蜜の行をなさつて、それを完成された、それが阿弥陀仏なのです」

B 「そういうことはどこに示されていますか」

D 「仏説無量寿経です。この経典の中に、私たちが仏になる因を私どもに代わって仕上げるために、法蔵菩薩は無量の徳行を積植(つみあげ)し、さまざまの菩薩行を行って、衆生の仏因となる(功徳を成就)してくださつたことが説かれています」

B 「私たちの仏因を代わって仕上げてくださったのですね」

D 「しかも阿弥陀仏はこのようにして衆生が(浄土にも)生まれずば正覺を取らない」とまでお誓いくださったのです」

B 「もし衆生が浄土に生まれなかつたら如来法蔵様ご自身が仏

(正覺)にならないと誓われたのはどういう意味があるのでしようか」

D 「阿弥陀如来は、単に絶対者である神が罪深い人間を哀れみ、愛するゆえに救うというのではないのです。一方的に救う神と一方的に救われる人との関係の宗教においては、恩恵を与えるもの(神)と恩恵を与えられる者(人間)、罪の負債を支払ったもの(神)と罪の負債を支払われた者(人)、支配するもの(神)と服従すべき者(人)、主なる神と僕なる人という主従的な関係があります。ですからその場合、人は神の恩恵によって救われたことへの感謝とともに神に大恩を負うている者という、いわば負い目に生きる、そうなるように思っています」

B 「この世のことでも、たとえば商売に失敗して借金まみれになつていた時、非常に親切な金持ちが私の窮(きゆう)状を見てかわいそうに思い、私の借金を代わりに支払ってくれた。支払つてもらつた私は借金がなくなつて非常に楽になり、その金持ちのおかげを有難く思う。しかし、一生、その金持ちの恩恵にたいして負い目を感じながら生きざるを得ないし、その人にはやはり従わざるを得ない。そういう主従的な関係が生まれる。それに似てますね」

D 「ええそうだと思います。ところが如来法蔵様が一切衆生を

救いたいという本願を起こされたのは、哀れな罪深い人間を一方的に(助けてやろう)とおぼしめしての救いではありません」

\*

B 「なぜですか」

D 「如来法蔵様はもともと仏のさとりである自他一如の智慧を本質としておられます。他である衆生と自己である法蔵菩薩を一体と認識しているさとり智慧です。無量寿経には

『もろもろの衆生において、視(みそな)わすこと自己のごとし』

とあります。一切の衆生を自己と見ている仏の智慧です。また法華経(譬喩品)には

『三界は、皆これ、わが有なり。その中の衆生は、悉くこれわが子なり』

とあります。衆生を自己の内容と見るゆえ、衆生をことごとく我が子と見る大悲の智慧です。それゆえ衆生の苦しみを自己の苦と観じておられる。また維摩経には

〈衆生病むがゆえに我病む〉

という有名な言葉があります。衆生の苦を我が苦と感じておられるのです」

B 「それはちょうど自分の子供が病気で苦しんでいるとき母親は自分の苦しみのように感じる。また子供の病気が治ると自分自身が治つたように感じる。そういう自他一体の感覚が親子の関係の間でも、極めて限定された範囲ですけれども、ありますね」

D 「そうですね。如来法蔵様が衆生を視る智慧はまさに「視わすこと自己のごとし」で、それを金子大榮先生は全人意識ともいわれています。全ての人を自己と見る心です。その純粹意識からおのずと一切衆生を我が子と慈愛する広大な慈悲が動き出すのであります。一切衆生の迷いを除き罪を除き、まことのさとの安樂を与えたいとの願です。もしそれができないようならこの法蔵自身もさとりを成就しないとまで誓われるのです」

B 「苦しむ子が助からねば親が助からぬように、一切衆生が助からねば我（法蔵菩薩）も助からぬといわれるのですね」  
D 「ええそうなのです。仏の智慧の必然性としての大慈悲、そこから本願が起こされ、

『たとい我、仏を得んに、十方衆生、（乃至）もし生まれずは、正覚を取らじ』

との誓願を起こされたのです。もし十方衆生が浄土に生まれて仏にならないようなら、法蔵自身も正覚（仏）にはならないとの誓いなのです」

B 「衆生を外において、その衆生を救うというのではなくて、衆生を自らとみて、衆生が助からなければ私も助からないとお心なのですね」

D 「ええ。そういうやるせない大悲のお心が南無阿弥陀仏として結晶しているのです。このお

心を松並さんは

『南無阿弥陀仏 この声を聞いています』

『お前に相談なしに、お前の南無阿弥陀仏に成ったぞや。いやでもあるうが、この度はこの弥陀にめんじて、助けさせてくれよ』

と、阿弥陀様が、両手を仕えて、頭を下げて頼んで御座る御姿、御声が、今この口に現れ給う南無阿弥陀仏であります。南無阿弥陀仏』

とおっしゃっていますが、身にしみますね」

B 「如来法蔵様には「困苦しているお前たちを助けてやるだの、助けてやっただの」というとらわれはチリばかりもないのですね」

D 「そうですね。それどころか、「助けさせてくれよ。お前が助からなければ私も助からないのだから」と、私どもに頭を下げておられる。私が助かるとへうこそ助かってくれた礼を言うぞ」のお心なのです。如来のご恩を私たちが喜ぶというけれども、助けられた私の喜びの何層倍も喜んで下さるのは如来様ご自身でありますよ」

B 「そうすると、阿弥陀仏は衆生を救われても「彼を救うてやった」という執われがないのですね」

D 「そのお心を曇鸞大師は、法蔵菩薩が衆生を済度する様は『無量の衆生を度すといえども、

実に一衆生として滅度を得る者なし。衆生を度すと示すこと、遊戯するがごとし』（浄土論註）

と申されています。無量の衆生を済度しても、法蔵菩薩のお心の中には一衆生も滅度（さとり）を得しめたという思いがないと申されています。衆生救済は仏の義務でも仏の自己犠牲でもありません」

\*

B 「一方、キリスト教やイスラム教などにおいてはどうか」

D 「神ははじめから絶対者であり、正義の神であり、愛の神であり、恩寵を罪人に与える神であるといわれています。それゆえ罪人に恩恵を与えて救う神、罪びとのために自己犠牲をする神であり、その神の恩寵によつて救われた人は、救って頂いた神の恩恵を担い、神に背かないように生きようとする。もしもまた神の恩恵に背いたり、あるいは神の掟に背くものは神の怒りをこうむるとまで感じられてくるようです。人は神に感謝しつつ、神をおそれながら生きる」と、そのようによく言われています」

B 「そうですか。そういう神に對して、如来法蔵様は「衆生を救うてやった」という執われがないのですね。そういう如来様のお助けであればこそ、救われた私は如来様に對して負い目やプレッシャーがない、如来様の

大悲の中で非常な開放感があるのですね」

D 「ええそうですね。ただ負い目がないぶん、真宗門徒はややだらしくなりがちですね。それは如来様の責任ではなくて、煩惱の深い私たちのゆえです。広大な慈悲をかけられていると、根がお粗末な私たちは広大な慈悲に座り込みかねないのです。本當に申し訳ないことです。一方、まじめなキリスト者やイスラム教徒は、神の恩恵に負い目を感じる分、神のいましめたも

うところに背かぬようという緊張感に生きることにもなりません。これが彼らの宗教の魅力でもありましょう」  
B 「如来法蔵様の慈悲をいただく私たちは煩惱のせいであらうならなくなるのですね」  
D 「阿弥陀様の慈悲に甘えるのはいいとしても、阿弥陀様の広大なご恩を思えば、阿弥陀様を悲しませないよう、また阿弥陀様がお喜びになるように自らの行いを慎みたいし、また善き行いをしたいものです」  
B 「そうありたいですね。私などは根性があかんたれですからキリスト教徒やイスラム教徒にはなれませんが、なつたとしてもついていくのはしんどくなると思います。それで真宗のなんともいえない広々とした自由が大変有り難いです」  
D 「ただそれほどの自由を賜ったのだから、その有難さを思っ

て世の中のお役に立てたらいと思えます。実は阿弥陀仏の慈悲はただ慈悲だけではなくて、慈悲のオブラートの中は智慧がつまっているのです」

B 「阿弥陀仏の慈悲の中身は智慧なのですね」

D 「ええですから、仏の慈悲を頂いたら、その慈悲には当然智慧があつて、その智慧が人の生活の上に働いてくるものなのです」

B 「そういう智慧はどのように受け取ったらいでしょうか」

D 「阿弥陀仏の智慧には自他一如のさとの智慧でありつつ、ものの正邪・真偽を見定める智慧でもあります。何が正しくて何がよこしまであるか、何が真実で、何が虚偽であるか、何が真で何が仮なるものかを、ハッキリと見定める智慧です。そのような仏の智慧が信心の智慧となつて私どもの人生活の中に次第に働かだしてきます。自己や世界の在り方を批判する眼となつて働いてきます。そしてそれは煩惱に振り回され、悪になじみがちな私を批判し続け、慚愧せしめ、あるべき方向へ歩ませしめようと働きかけてくださる、そういう智慧が仏の慈悲には離れないのです」

B 「大悲の智慧はかぎりなく自己と世界を批判する智慧の眼でもあつて、あるべき方向へと導いてくださるのですね」（了）

# 歎異抄 第十八章第三講

法性のさとりをひらいて、長短方円の  
かたちにもあらず、青黄赤白黒のいろ  
をもはなれなば、なにをもってか大小を  
さだむべきや。(歎異抄第十八章より)

現代語訳(真実のさとりを開いて、長い  
とか短いとか、四角いとか丸いとかのか  
たちを超え、また青・黄・赤・白・黒な  
どの色を離れた仏の身となるのなら、ど  
うして大きいとか小さいとかを決めるこ  
とができるでしょうか。)

「法性のさとりをひらく」とここでい  
われている法性とは、へもの本性・本  
質あるいは真実性」といわれています。  
その法性を覚っている仏を法性法身あ  
るいは法身といわれます。そしてこの(法  
身)の法とは真実、身とは「はたらき」  
を表す言葉といえましょう。

普通、身というのは身体のことです。  
しかし法身の場合の身は肉体というもの  
ではないわけで、法の真実を働きの面よ  
り法の身といわれるのでありましょう。  
このように法のはたらきを身とか寿命で  
表される場合があります。阿弥陀仏のこ  
とを報身とか法身という身で表したり、  
無量寿仏というように、阿弥陀仏のはた  
らきを(寿命)いわばいのちで表したり  
します。このように身とかいのちで仏の  
「はたらき」を表します。

さて、今日(いのち)という言葉が非  
常によく使われますので、いのちは何か

について、そしてそれと身との関わりを  
仏教の教えに添って考えてみたいと思  
います。

一般に、身体とは「いのち」の具体的  
な形をいうのでしよう。(私のいのち)  
という場合の具体的な形は(私の身体)  
であります。鳥のいのちの形は鳥の身で  
あります。花のいのちの具体的な形は花  
びらや葉や茎であります。人のいのち  
も身心となつて具体化しています。身  
とはいのちの働きの具体的なもの、いの  
ちの形、いのちの自己限定であります。

さて人のいのちの場合、身体はい  
のちの取る姿であつていのちそのもので  
はないと思います。ですから肉体を(い  
のち)とつかむとそれはいのちの殻をつ  
かんだことであり、いのちの影をつかん  
だにすぎません。金子先生の言葉に  
「花びらは散つても花のいのちは散らな  
い」

というのがあります。たとえば、桜の花  
びらは毎年一回限りそのつど咲いてはそ  
のつど散つていく。しかし花びらはその  
つどちつても、その花を毎年咲かせてい  
るさくらの(いのちそのもの)は年々相  
続されていく。こういわれることによつ  
て金子先生はいのちと身の間を教えて  
下さいます。

こうした「いのちの形」といふそのも  
の「について」大涅槃經(南伝)には  
次のようなお話があります。

『釈尊がお亡くなりになる前、インド  
北方に向かつて最後の旅をされていまし  
た。ペールヴァ村に滞在されていたとき、  
恐ろしい病いが生じ、死ぬほどの激痛が  
釈尊に起こりました。しかし、尊師は、  
心に念じて、よく気をつけて、悩まされ

ることなく、苦痛を堪え忍ばれました。  
しばらくして釈尊は病いから回復され、  
弟子のアーナンダ(阿難)に対して

「アーナンダよ。わたしはもう老い朽ち、  
齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り  
過ぎ、老齢に達した。わが齢は八十とな  
った。たとえば古ぼけた車が革紐の助け  
によつてやつと動いて行くように、おそ  
らくわたしの身体は革紐の助けによつて  
もっているのだ。(乃至)

しかし、相の無い心の統一に入つてと  
どまるとき、そのとき、(かれの身体は  
健全)なのである』

この釈尊のお言葉を伺いますと、釈尊  
の肉体としてのいのちは老衰し病にな  
り、死期が近づいて、朽ち果てようとし  
ています。しかし、禪定に入つて感得  
されているいのちについて釈尊は、(か  
れの身体は健全なのである)といわれて  
います。この場合の健全なる身体とは形  
を超えた限りないいのちそのものといえ  
るのではないのでしょうか。そのいのちは  
釈尊ご自身の私有化を許さない、肉体と  
しての釈尊を超え、釈尊を貫いているか  
ぎりないいのちのはたらき、釈尊におけ  
る真実のいのちといふべきものでありま  
しょう。自己にきていているいのちであ  
りながら自己を超えている、そういういのち  
なるゆえに釈尊は(かれの)と呼んでお  
られるのでありましょう。朽ちようとし  
ている身体に対して健全な身体とは何  
か。それこそ釈尊をして釈尊たらしめて  
いる限りないいのち、いわば無量寿とい  
つていいのではないのでしょうか。

この經典は、限りなきいのちそのもの  
とそれが形を取った個物ないしは身体と  
の関係をよく表していると思います。

さて、今日の科学的視野では「いのち」  
とはなにかというと、それは、「動き」  
であり「働き」であり「存在のエネルギ  
ー」とでもいふべきものでしよう。

ところが仏教では、「動き」「働き」  
あるいは「存在のエネルギー」という物  
的ないのちは、同時に「覚体」いわばか  
ぎりなくめざめているものであるといわ  
れています。存在でありつつ、目覚めて  
いるもの、さどつているものであるとい  
われます。

真実のいのちとはかたちのない「動き」  
であり「はたらき」であり、しかもその  
いのちは目覚め(覚り)を含んでいます。  
それゆえたんなる動きや働きにとどまら  
ず、自から覚め他を目ざませようと働く  
覚体であります。それを法性法身と示さ  
れてきたのではないのでしょうか。

(なお断つておきますが、このような法  
性法身というものは何かについて、私の  
ような愚かなものがとても確認できるも  
のではありません。インドの菩薩方から  
の教えを通して、お知らせ頂いているま  
です)

さて歎異抄にいうように、法性法身は  
個物としての形を離れていますから「長  
短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒  
のいろをもはなれ」ているのは当然であ  
るし、もし長短方円の形を取っているも  
のであれば、それはいのちの取った一つ  
の形にすぎません。そこで、法性法身は  
色や形や大小を超えているゆえ「仏に大  
小の分量をさだめることあるべからず」  
といわれるのであります。(了)